東南アジア研究　53巻2号　2016年1月

書評論文

東南アジア山地研究は地域研究として成り立つのか？

今　村　真　央*

Upland Southeast Asia: Can It Be an Area Studies?

IMAMURA Masao*

クリスチャン・ダニエルス（編）．『東南アジア大陸部 —— 山地民の歴史と文化』言叢社，2014，348p.

2009年に発表されたジェームズ・スコットの *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia* は，邦訳版が『ゾミア —— 脱国家の世界史』という題で2013年に出版され，広く読まれている。日本では，中国南西部を含む東南アジア大陸部山地帯について，以前より多くの研究の蓄積があり，『ゾミア』発刊後も質の高い考察が次々と発表されている。クリスチャン・ダニエルスが編集した『東南アジア大陸部 —— 山地民の歴史と文化』は，日本の研究者による同地帯に関する論考を1冊にまとめた本である。

本書は，2006年から2013年まで東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所を拠点に進められた二つの共同研究（「タイ文化圏における山地民の歴史的研究」と「東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触 —— タイ文化圏を中心として」）の成果であり，研究メンバーによって執筆された8章から成り立っている。8つの論文で扱われているトピックは，（1）山地民の国家思想（片岡樹），（2）物語・ナラティブに表れる民族・文明観（飯島明子），（3）山地民と平地民の協力関係（クリスチャン・ダニエルス），（4）周縁の仏教史（村上忠良），（5）山地民と文字（山田敦士），（6）家族構成の社会史（吉野晃），（7）人口動態（富田晋介，ネイサン・バデノック），（8）農耕技術の伝播（園江満）と，各々斬新であると同時に，非常に多岐に渡っている。また，各事例の対象に目を向けると，ラフ（片岡），ラワ（飯島），ジンポー（ダニエルス），シャン（村上），ワ（山田），ユーミエン（吉野）といった二次文献が限られた民族集団について，著者自身によって集められた独自のデータが豊富に提供されていて，資料的価値が高い内容になっている。さらに第7章と第8章では，焦点が特定の民族集団から人口動態史と稲作技術史に移り，新鮮な視点が提示されている。1冊で日本での東南アジア研究の水準の高さと幅の広さが俯瞰できる本である。

本書については3本の書評［堀江 2014; 生駒 2015; 二文字屋 2015］が出ていて，各章の内容を簡潔にまとめる作業が，すでに3度行われているので，ここでは章ごとの紹介という作業を行わず，編集書全体を考えることによって，東南アジアの山地研究のこれからについて考えたい。特に「東南アジア大陸部山地」という地理的枠組みに焦点

* 京都大学東南アジア研究所；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
e-mail: imamura@cseas.kyoto-u.ac.jp

を当て，このフレーミングの根拠を吟味する機会としたい。評者が提起したいのは，この空間を一つの「地域」としてみなす論理はどのようなものか，という問いである。それは言い換えれば，「東南アジア大陸部山地研究」はいかにして一つの地域研究として成り立つのか，という問いだ。

「ゾミア」とは？

本書には「東南アジア大陸部山地民の歴史と文化」という題目で多くの論文が集められているわけだが，この「東南アジア大陸部山地」がどこからどこまでを含む地域なのか，そしてなぜこの地域を一つのまとまりとして考える必要があるのかは特に説明されていない。本書に収められているような論文を1冊の編集本として束ねているものは何なのか，この問いに答えるために，まずスコットが「ゾミア」という語で何を提起しようとしたのか確認しておこう。

スコットは東南アジア大陸部の山地帯に新しい名称を当てることによって，この広大な山地帯を一つの「地域」として捉えることを提唱した。彼自身が認めている通り，「ゾミア」という名はもともとオランダの学者ウィレム・ファン・スヘンデル（Willem van Schendel）によって提案されたものである。[1] この提案はまず，従来の学術研究において近代領土国家という単位があまりにも前提とされてきたことに対する批判であった。「東南アジア」「東アジア」「南アジア」といったより大きな「地域」をフレームとして捉えても，その構成要素は結局のところミャンマー，タイ，ラオス，ベトナムといった国家であることにかわりない。それでは国家を分析単位としない地域研究とはどのようなものになるのだろうか？ファン・スヘンデルは，フェルナン・ブローデルの地中海史研究を一つのモデルとみなし，「ブローデルのような学者たちが，海を一つの地域世界として捉え直したのであれば，世界一の山地帯を同様に捉え直すこともできるはずだろう」と新しい空間的枠組みを提案した［van Schendel 2002: 654］。[2]

ファン・スヘンデルによって地域研究のあり方を批判する目的で挑発的に提起された「ゾミア」を，スコットはアナーキズム史の舞台として仕立て上げた。東南アジアの山地社会とは歴史上「国家に抗する社会」であり，このアナーキズム史こそがこの地域全体の世界史的意義である，というのが彼の大胆な主張である。[3]『ゾミア』ではこの歴史物語が二千年というとてつもなく長いスパンで語られている。というのも，彼によれば，「国家」と「国家に抗する社会」には，当然のことながら同じ長さの歴史があるからである。東南アジアにおいて国家という政治形態が本格的に機能するようになったのはおよそ二千年前の出来事である以上，東南アジアのアナーキズムもまた二千年の歴史を持っている，と彼は説いている。

『ゾミア』に対する批判

スコット自身が『ゾミア』の冒頭部で認めていることであるが，二千年のゾミア史を直接裏付ける歴史学的証拠は非常に限られている。15世紀以前の出来事のうちスコットが言及しているのは，アジアから遠く離れた地域（例えばローマ帝国の奴隷制）に限られていて，彼は明朝以前のアジア史を具体的に論じていない。『ゾミア』はベルベル，コサック，マルーンといった数々の「国家から逃れた辺境民」を世界史のパターンとして捉え，そのパターンを下敷きに東南アジア山地史を大幅に修正したが，この歴史的叙述を可能にしているのは史料に基づいた調査というより類推的想像力に

1）ジャン・ミショーも「Southeast Asian Massif（東南アジア山塊）」という語で，東南アジア大陸部山地を一つの空間単位としてとらえる見方を長年論じている［Michaud 2010］。

2）スヘンデルからの引用文は『ゾミア』より［スコット 2013：原注 x］。

3）スヘンデルの「ゾミア」地域はアフガニスタンなどヒマラヤ山脈全域を含め，スコットの「ゾミア」と異なる点にも注意しておく必要があるだろう。挑発的な「ゾミア」概念を提起したものの，スヘンデル自身は写真などの歴史資料を使った国境近代史を描き続けている［van Schendel and Pachuau 2015］。

あるといってよいだろう。そのような「方法」に対してはすでに多くの歴史家から批判が出ている。[4] ダニエルス自身もすでに 2010 年に『ゾミア』の書評をこの紙面（『東南アジア研究』）で書いており，スコットの比較や類推を批判の的にしている。例えばスコットは北米や中米のマルーン共同体を国家から逃れた人々として挙げているが，この事例が東南アジア大陸部山地とどう関係があるのか不明である，と指摘している［Daniels 2010: 208］。

本書（『東南アジア大陸部 —— 山地民の歴史と文化』）の序論でも編者ダニエルスは，スコットについて，「如何せん史料の利用には方法上の課題が多く，仮定の域を脱していない」と評している（p. 11）。そして彼は『ゾミア』に対する本書の立場を以下のようにまとめている。「スコットは，リーチと同様に山地と盆地の関係の特色を〈対立〉という概念で説明するが，綿密なフィールドワークを行った本研究課題の……研究者は……相互依存と共同性など共存的要素の重要性を指摘して，スコットとは異なる山地民の実態を明らかにしている。本書所収の論考の多くは，上記の立場から個別事例を中心に山地と盆地の関係がはたしてスコットが主張するほど敵対的であったかどうかを検証している」（p. 11）。つまり，平地と山地の関係は歴史上スコットが主張するほど対立離反を基調としたものではなかった，というのが本書のスコットに対する主な反論である。

しかしより重要なのは，山地全体を一つの地域として捉えるというアプローチに対して，本書は極めて慎重な姿勢をとっていることだろう。ダニエルスは「本書の執筆者は個別事例を提示して特定の地域や民族集団の歴史体験から山地民の歴史を議論しており，意識的に〈共通な歴史〉を構築する作業を行っていない」（p. 12）と断っている。その理由として「当該地域の山地民には共通の文化を見いだすのは極めて困難で」あり，「異なる民族集団には共通の歴史があると主張するのは難しい」（p. 12）と説明している。つまり本書は，対立・抵抗をモチーフとする歴史観に対してのみならず，山地帯に文化的・歴史的共通性を求めるアプローチ全般に対して否定的であり，一地域としての全体像を提示することを拒んでいる。それゆえ東南アジア大陸部山地と他の地域を比較したり，地域を超えたグローバルな動きに結びつけるといった試みも本書には全く見当たらない。ブローデルの地中海史のような，空間的スケールの大きな枠組みは東南アジア山地史研究にとっては参考にならない，というのが本書の基本的な判断であるようだ。

この判断に少なからず驚かされたのは評者だけだろうか。というのも，東南アジア大陸部の山地帯を一つの地域として捉えるという試みを，スコットはおろかファン・スヘンデル以前から推し進めていたのは他ならぬダニエルス率いる共同研究であった。彼らは長年「タイ文化圏」もしくは「シャン文化圏」という枠組みを繰り返し提唱したが，その「文化圏」という視点が本書ではすっかり息を潜めている。

「タイ文化圏」（「シャン文化圏」）とは？

「シャン文化圏における言語学的・文化人類学的調査」（代表 新谷忠彦）という共同調査が始まったのは 20 年前の 1995 年のことであった。1998 年に出版された『黄金の四角地帯 —— シャン文化圏の歴史・言語・民族』の第一章「〈シャン文化圏〉の概念が提唱するもの」で新谷は，タイ，ビルマ，ラオス，中国雲南省が国境を接する地域を「黄金の四角地帯」と呼び，「黄金の四角地帯を中心にした主に Tai 系民族の分布地域をシャン文化圏または Tai 文化圏と呼ぶ」と，新たな枠組みと名称を提示した［新谷 1998: 10］。ダニエルスも 2007 年に『国境なき山地民 —— タイ文化圏の生態誌』という魅力的な書を編集出版しているが，彼もそこで「六つの近代国家の領土にまたがるタイ文化圏は，多数の民族が暮らす広大な地域である。その範囲はインドのアッサム州，ミャンマー（ビルマ），タ

4）歴史家による批判で代表的なものとして，ダニエルス，アウントウィン，そしてリーバーマンによる書評を挙げることができる［Daniels 2010; Dove *et al.* 2011; Lieberman 2010］。

イ王国，ラオス，ヴェトナムおよび中国雲南省の一部を含んでいる」と，この空間的枠組みを継承している［ダニエルズ 2007: 6］。

興味深いのは，この文化圏とスコットの「ゾミア」が地図の上で大幅に重なるものであったという点だけではない。スコットがアナーキズム論を展開する以前に，新谷とダニエルスがほぼ同じ枠組みを，特定の文化的要素を共通項とすることによって提唱していた点である。『国境なき山地民』が書かれた時点では，山地民全体を対象とする歴史叙述についてもダニエルスは前向きな姿勢を見せていた。「山地民が〈山地〉という自然環境で暮らすがゆえに創生されてきた共通の要素や，〈平地〉という中心に対して山地という周縁に居住したがゆえに共有するようになった歴史経験など，共通する側面が見落とされてきた。……多様性と個別文化のみならず，山地民に共通する文化と歴史のフレーム・ワークの中で，山地民が近年に至るまでに歩んできた道を紹介しておきたい」と「総論 山地民が歩んできた道」で主張している［同所］。

『国境なき山地民』では共通性が重視され，『東南アジア大陸部 —— 山地民の歴史と文化』では多様性が重視されている。つまりこの二つの書は逆向きの視点を促している。読者は，この二書の関係をどう捉えるべきなのか。「シャン・タイ文化圏」というフレームはどうなったのか。共同研究において大きなシフトがあったのか。[5] これまで独特な概念提唱を興味深く追ってきた評者には疑問が残った。

方法論的問い

『ゾミア』と『東南アジア大陸部 —— 山地民の歴史と文化』という二つの書は，東南アジア大陸部山地という地域対象を共有しながらも，研究の意義や方法について異なる思考に導かれている。スコットは，ファン・スヘンデルに強く共鳴し，従来の山地民研究を『ゾミア』で以下のように批判した。「しかしそのような［ファン・スヘンデルが提唱したような］読み直しはこれまで行われなかった。ゾミアの数々の地域からは優れた研究が提出されているが，これらの研究は〈ゾミア研究〉を想起することもなければ，社会科学全般に対して新たな問いや方法論を投げかけるべく新しい視点を築き上げようともしてこなかった」［スコット 2013: 原注 x］。従来の山地民研究は，現存する国家の領土に囚われすぎているのみならず，対象のスケールがあまりにも小さく「木を見て森を見ず」状態になっている。「ゾミア研究」とは，「タイ北部」や「中国南西部」といった国家辺境を対象とするものではなく，またカレン，ラフ，ワといった個々の少数民族集団を対象とするものでもない。山地帯全体を対象とする，スケールの大きな研究が必要とされている，というのがスコットの判断である。東南アジア大陸部山地を，強引にマクロ・レベルで捉え，その歴史をできるだけ太い筆で描くことこそ彼の狙いであった。スコットは『ゾミア』の冒頭で，このアナーキズム史観は「細かい点において幾つか間違って」いるかもしれないが，大筋としては当たっているだろうと記しているが，こういった言葉には研究者として彼の姿勢が良くも悪しくもよく表れている［同上書：xi］。

対照的に，『東南アジア大陸部 —— 山地民の歴史と文化』は，空間的にも時間的にも小さなスケールにこだわり，あくまでもミクロ・レベルで確認できる事象に執着するという姿勢をとっている。この広大な山地全体について上空高くからメタ・ナラティブを語ることに対して，研究者は禁欲的でなければいけない，という姿勢がそこからは感じられる。これを日本の研究者に特有の姿勢と考えることは妥当だろう。アンソニー・リードや速水洋子が指摘しているように，日本人による地域研究者の強みは堅実な事例研究の蓄積にある［Reid 2004: 6; Hayami 2013: 19］。[6] とくに山地民研

5）ダニエルスが編集した *Southeast Asian Studies* の特集号では「northern continental Southeast Asia」という聞きなれない語が使われていて，地理的呼称の難しさが表れている［Daniels 2013］。

6）日本だけではなく国際的にも，東南アジア研究という研究分野では，大胆な仮説より綿密↗

究はこれまで，研究者が村に入り，参与観察に基づいたフィールドワークを長期間行い，その村を焦点とした民族誌を書くことが規範的アプローチとして長年継承されてきた。[7] ダニエルスが強調しているように，本書を特徴づけているのはまさしくそういった「綿密なフィールドワーク」（p. 11）であり，これまでに書かれた3本の書評でも，精緻さを重んじる実証主義的アプローチが繰り返し高く評価されている［堀江 2014: 141; 生駒 2015: 172; 二文字屋 2015: 176］。

スコットのような学者が大胆な仮説を評価する一方で，日本の研究者は，現地の言葉をしっかりと習得し，史料を精読し，堅実なデータの積み重ねを重んじてきた。森の全体像ばかりに気を取られているゾミア論者たちは，そもそも木をしっかりと見ていないのでは，という異論が『東南アジア大陸部 —— 山地民の歴史と文化』の背後にはあるのではないだろうか。そうであれば，その反論をもっと展開してもよかったのではないだろうか。というのも評者が読む限り，本書が『ゾミア』に投げかけている最も根源的な問いは方法論的なものである。本書の奥底には，スコットの想像的研究に対する実証主義研究側からの批判があるのだが，この批判が論点として明示されているわけではない。「木」と「森」の相互関係を捉えるにはどのような調査方法が有効だろうか。フィールドワークから得た村での発見と世界史の大きな流れを繋げるにはどういう叙述の仕方があるのだろうか。こういった問いに対する答えをこの研究陣から聞きたいと思うのは評者だけではないだろう。本書には，結論の章もあとがきも設けられておらず，序章は「農耕の技術」という短い節で唐突に終わってしまっているが，東南アジア山地研究の現状とこれからの展望をもう少しまとめて提示してあれば，学術書としてさらなる厚みが生まれただろうし，より幅広い読者層にアピールできたことだろう。[8]

もちろん『ゾミア』以後の山地民研究を考えるにあたり，本書には数多くのヒントが散りばめられている。中でも，歴史的物語が時代と共に徐々に修正されていくプロセスを丹念に追って分析した，第2章「ラワータイ関係をめぐるナラティブとメタ・ナラティブ」は方法論的示唆に極めて富んでいる。この論文で飯島は，歴史叙述が真実かそれともフィクションかという問いを超え，ある歴史物語りが「フィクションであるなら，なぜそのような語りが生まれ，かつ普及したのかが問われねばならない」（p. 68）と指摘している。山地民の歴史叙述を試みる上で求められているのはまさしくこのような視点ではないだろうか。つまり「ゾミア史はフィクションである」という批判だけ

↘ な調査が奨励されてきたといえるだろう。中国研究やインド研究は，広範囲に影響力を及ぼした古典文明を対象とする学問であり，時間的にも空間的にもスケールの大きな研究が行われる傾向が比較的強いのに対して，東南アジア研究では「小さな伝統（little tradition）」に研究者の関心が注がれてきた。この点については *Southeast Asian Studies in the Balance: Reflections from America*［Hirschman *et al.* 1992］に興味深い議論を見つけることができる。

7）エドマンド・リーチによる古典『高地ビルマの政治体系』は，この「x 族 y 村の民族誌」に極めて批判的な研究である［リーチ 1987］。しかし，リーチ批判を展開したフリードマンの経済人類学的研究こそ，山地史をマクロ・レベルで考察した最たる例であろう［Friedman 1998］。ヌージェントもまた，芥子（ケシ）というグローバル商品作物史の視点から，リーチの分析を批判し，山地史の修正を促した［Nugent 1982］。リーチからフリードマンとヌージェントに至る，カチンを対象とした民族誌と理論については石川登がよくまとめている［石川 1992］。フリードマンが『ゾミア』の書評論文で，持論を再展開していることも注目に値する［Friedman 2011］。

8）サンジャイ・スブラフマニヤムが，『ゾミア』を読んでも最後まで分からないのは，その認識論的な基盤であると指摘している。しかしスブラフマニヤムが，「この本は頭で読む本ではなく心で読む本なのかもしれない（Perhaps it should be read not with the head but with the heart）」という文で，書評を結んでことにも注目しておきたい［Subrahmanyam 2010］。

では十分ではなく，「なぜそのようなフィクションが生まれかつ普及するのか」という問いにも答えを出さなくてはいけないのだろう。[9)]

仮説の役割

スコットの大胆なゾミア史は広く読まれているが，その理由の一つはメタ・ナラティブを通して新鮮な視点が明快に打ち出されていることだろう。そのアナーキズム史観に対してダニエルスは「仮定の域を脱していない」と評しているが，スコット自身が「私の主張は単純だが挑発的で，賛否両論を引き起こすだろう」と『ゾミア』の冒頭で断っている［スコット 2013: ix］。私が見る限り，そもそも挑発的な仮説を世に出して新しい視点を促すことこそが，スコットが繰り返し自らに課している役割である。その姿勢はすでに40年近く前に出版された『モーラル・エコノミー ―― 東南アジアの農民叛乱と生存維持』から，*Weapons of the Weak*，そして *Seeing like a State* まで一貫している。

しかし，突飛とも思えるような歴史的仮説を提唱している東南アジア研究者はスコットだけではないという点も確認しておこう。ミャンマー史の大家ヴィクター・リーバーマンもまた，*Strange Parallels* という2巻組の大著において壮大な仮説を近年発表した。彼は，東南アジア大陸部における国家形成をユーラシアというレベルで捉え，東南アジア大陸部のみならず，フランス，ロシア，日本，中国を含めた比較を行い，千年に及ぶ国家形成史のパターンに「不思議な平行（strange parallels）」関係を見出す。上巻の序章で，このような大胆な主張に対しては，幾つもの批判が浴びせられるだろうとリーバーマンは予防線をはり，仮説の役割について以下のように述べている。

「東南アジアの歴史学はまだあまりにも日が浅く，実証的研究を積み重ねることが先決事項ではないか」もしくは「東南アジア史研究では，基本的な事実の確認さえ十分にできてないので，壮大な仮説を検討する前に，まず実証的な調査に基づいた史実確認に専念するべきだ」といった批判が出てくるかもしれない。しかし，記録と理論の関係は常に相互対話的なものであり，どちらか一方を先決事項として扱うべきではない。このような批判は，事実を蓄積していけばそこから自ずと仮説が浮かび上がってくるという期待に基づいているが，実際のところ仮説とはそのように現れてくるものではない。万華鏡のように捉えどころのない対象から特定の事象を「事実」として認める過程において，研究者はすでに暫定的な枠組みをフィルターとして用いることを余儀なくされる。大量のデータからある特定の歴史のパターンを見出すプロセスにおいては常に作業仮説が必要である。また同時に，新たな仮説が提示されることによって，これまで注目されてこなかった史料に光が当たる。つまり，仮説を打ち出すことによって，新しい資料が発見されることもある［Lieberman 2003: 81］。

リーバーマンは優れた歴史研究のモデルとしてアンソニー・リードの「交易の時代」を挙げているが，そのリードが，近著 *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads* で，大規模の地震，女性の社会的地位，そして長期に及んだ無国家状態の3点を東南アジアの特徴である主張していることは興味深い［Reid 2015: xvii–xviii］。彼によれば，無国家（stateless）時代から国家時代への決定的な転換は14–15世紀に起こった。聖職者と国家による文字の使用が本格的になり，文明対野蛮という二分法が社会に広まり，森林の無国家社会に対して灌漑と都市が優勢になっていった。この転換期以前，東南アジアという空間の圧倒的大半は森林や草原であり，まだ無国家の時代にあったということを stateless majority という語で強調している［*ibid.*: 49–53］。リードは，スコットの語る「アナーキズム史」とリーバーマンが書く国家形成史を二つの相反する歴史観と捉えるより，前近代と近代という二つの異なる時代に焦点を当てた研究として捉え，二者をバランス良く組み合わせようと試みているようだ。「国家の時代」への変遷がどのような歴史的経緯であったか，山地のみならず平地を対象とする研究でもさらに重要な問いと

9）ジョンソンは近著 *Slow Anthropology* でこの問いを執拗なまでに追求している［Jonsson 2014］。

なっていくのかもしれない。

東南アジア大陸部山地帯は一つの地域として捉えられるべきなのか。この地域を対象とする研究は一つの地域研究として成り立つのか。共通性と多様性をめぐるこの古くて新しい問いに答えるには，仮説と実証の相互関係についてのさらなる対話と論争が有益だろう。そのような討論をダニエルスはじめ本書の執筆陣が率いていくことを期待したい。

『ゾミア』出版後，ダニエルスによって率いられた研究陣は，京都大学東南アジア研究所刊行の *Southeast Asia Studies* でも東南アジア山地民に焦点を当てた質の高い英文論文を5本発表している［Daniels 2013］。本書に収められた8本の論文と合わせて計13本の論文を世に出したこの研究陣の力量とダニエルスの類まれなリーダーシップは際立っている。これらの論文は，これからの山地研究の方向を考えるにあたって欠かせない道標になっている。

引用文献

日本語文献

ダニエルズ，クリスティアン（編）．2007.『自然と文化そしてことば〈03〉特集 国境なき山地民 —— タイ文化圏の生態誌』東京：葫蘆舎.

堀江未央．2014.「書評　クリスチャン・ダニエルス（編）.『東南アジア大陸部 —— 山地民の歴史と文化』言叢社，2014年，348p.」『アジア・アフリカ地域研究』14(1): 138–142.

生駒美樹．2015.「書評　クリスチャン・ダニエルス（編）.『東南アジア大陸部 —— 山地民の歴史と文化』言叢社，2014年，322＋27頁」『東南アジア —— 歴史と文化』44: 168–172.

石川　登．1992.「民族誌と理論 ——『高地ビルマ』をめぐる人類学小史 1954–1982」『民族學研究』57(1): 40–53.

リーチ，E. R. 1987.『高地ビルマの政治体系』関本照夫（訳）．東京：弘文堂.

二文字屋　脩．2015.「書評　クリスチャン・ダニエルス（編）.『東南アジア大陸部 —— 山地民の歴史と文化』言叢社，2014年，322＋27頁」『東南アジア —— 歴史と文化』44: 173–177.

スコット，ジェームズ　C．1990.『モーラル・エコノミー —— 東南アジアの農民叛乱と生存維持』高橋彰（訳）．東京：勁草書房.

————．2013.『ゾミア —— 脱国家の世界史』佐藤仁（監訳）；池田和人；今村真央；久保忠行；田崎郁子；内藤大輔；中井仙丈（訳）．東京：みすず書房.

新谷忠彦（編）．1998.『黄金の四角地帯 —— シャン文化圏の歴史・言語・民族』東京：慶友社.

外国語文献

Daniels, Christian. 2010. Review of *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia* by James C. Scott. *Tonan Ajia Kenkyu* 48(2): 205–210.

————. 2013. Introduction. In Upland Peoples in the Making of History in Northern Continental Southeast Asia edited by Christian Daniels, special issue, *Southeast Asian Studies* 2 (1): 205–210.

Dove, Michael R.; Jonsson, Hjorleifur; and Aung-Thwin, Michael. 2011. Review of *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia* by James C. Scott. *Bijdragen Tot de Taal-, Land- En Volkenkunde / Journal of the Humanities and Social Sciences of Southeast Asia* 167 (1): 86–99.

Friedman, Jonathan. 1998. *System, Structure, and Contradiction: The Evolution of "Asiatic" Social Formations*. Walnut Creek: AltaMira Press.

————. 2011. States, Hinterlands, and Governance in Southeast Asia. *Focaal: Journal of Global and Historical Anthropology* 61: 117–122.

Hayami, Yoko. 2013. Southeast Asian Studies in Japan. *CSEAS Newsletter* 68: 18–20.

Hirschman, Charles; Keyes, Charles F.; Hutterer, Karl; Joint Committee on Southeast Asia; American Council of Learned Societies; and Southeast Asia Council. 1992. *Southeast Asian Studies in the Balance: Reflections from America*. Ann Arbor: The Association of Asian Studies.

Jonsson, Hjorleifur. 2014. *Slow Anthropology: Negotiating Difference with the Iu Mien*. Ithaca: Cornell University Press.

Leach, Edmund Ronald. ［1954］1965. *Political Systems of Highland Burma: A Study of Kachin Social Structure*. Boston: Beacon Press.

Lieberman, Victor. 2003. *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c. 800–1830*.

Volume 1 *Integration on the Mainland*. Cambridge: Cambridge University Press.

———. 2010. A Zone of Refuge in Southeast Asia? Reconceptualizing Interior Spaces. *Journal of Global History* 5(2): 333–346.

Michaud, Jean. 2006. *Historical Dictionary of the Peoples of the Southeast Asian Massif*. Lanham: Scarecrow Press.

———. 2010. Editorial: Zomia and beyond. *Journal of Global History* 5(2): 187–214.

Nugent, David. 1982. Closed Systems and Contradiction: The Kachin in and out of History. *Man* 17(3): 508–527.

Reid, Anthony. 2004. Studying Southeast Asia in a Globalized World. *Taiwan Journal of Southeast Asian Studies* 臺灣東南亞學刊 1(2): 3–18.

———. 2015. *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads*. Chichester: Wiley-Blackwell.

Scott, James C. 1976. *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia*. New Haven and London: Yale University Press.

———. 1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven: Yale University Press.

———. 1998. *Seeing like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*. Yale Agrarian Studies. New Haven and London: Yale University Press.

———. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.

Subrahmanyam, Sanjay. 2010. The View from the Top. Review of *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia* by James C. Scott. *London Review of Books* 32(23): 25–26.

van Schendel, Willem. 2002. Geographies of Knowing, Geographies of Ignorance: Jumping Scale in Southeast Asia. *Environment and Planning D: Society and Space* 20(6): 647–668.

van Schendel, Willem; and Pachuau, Joy L. K. 2015. *The Camera as Witness: A Social History of Mizoram, Northeast India*. Delhi: Cambridge University Press.